

## 磁器製ランプシェードで 空間にアプローチしていく

飛松弘隆さん(飛松陶器)に聞く

透光性を持つ磁土を使用したランプシェードを制作する陶磁器作家の飛松弘隆さんは、「眺めるための『作品』ではなく、人々の心に作用するような『空間』をつくり出す照明器具を手掛けていきたい」と語る。その姿勢は、どのような過程を経て具現化していくのだろうか。さまざまな試作品や型が並ぶ工房で話を聞いた。

取材・文／難波乙 撮影／白石和弘 堀口宏明(ポートレート)

### 始まりはミルクガラスの ランプシェード

江戸情緒を残す東京・清澄白河の住宅街の一角に、飛松陶器の工房はある。優しく穏やかな光を放ち、手で触れると焼き物ならではの温かさが伝わってくる磁器製ランプシェードは、この小さな工房でひとつずつ手作業で制作されている。

飛松弘隆さんが陶磁器の世界に入ったきっかけは、美術大学への入学だったと言う。「陶芸はどこか焼き物の産地で師匠について修行するイメージがあると思うのですが、僕の場合は多摩美術大学工芸科の陶プログラムに入ったのがきっかけでした。大学で学んだのは素材としての陶を用いたファインアートで、器と向き合うようになったのは卒業してからのことです。在学時から持っていた、自分が器をつくったらどういふものができるのだろうという好奇心が目標に変わり、陶芸教室で働きながら一から学び、作家としての道を模索し始めました。昼間は教室の生徒に教えつつ、先生や同じ助手の仲間から教えてもらい、勉強していく。夜は陶芸仲間と共に工房で試行錯誤を繰り返しました。世の中に陶芸家はたくさんいます。だからこそ、自分の中から純粋に湧き出てくるものが見つかるまで、作品を発表する気はありませんでした。どこかで見たことがあるようなものを自分の作品として発表するのは嫌だったんです」

研究を重ねて4年が経過した2008年、初めての

作品となる磁器製カップ「fin」が完成。これとほぼ同時期に、磁器製シェードへの取り組みをスタートさせている。

「fin」を開発中に趣味で足を運んだ骨董市で、昭和初期につくられたミルクガラスの製シェードと出合いました。直に触れ、「これは光のための器なんだ」と思った時の感動は、今でも鮮明に覚えています。それからしばらくして、ガラスの主成分であるケイ素を多めに配合した、光を透す磁器用の土を陶芸仲間が見つけてくれました。以前から、人や空間に作用するような作品を世に送り出したいという気持ちをずっと強く持っており、この土なら表現できるのではと考えました。テーブルに磁器製カップを置き、磁器製ランプシェードからそのカップを照らす。空間自体が自分の作品になると思ったんです」

ガラスの融点はおよそ900℃に対し、磁器は通常1250℃位の温度で焼成する。ケイ素の含有量が多い土は、磁器の温度帯では形が保てずに窯の中で潰れ、逆に低すぎると磁器の焼き上がり甘くなり、もろくなってしまふ。こうして、再び新たな試行錯誤の日々へと入っていくこととなった。

「この土は、もともと単純な形状を想定してブレンドされたものでした。でも、やるからには自由な発想でつくりたい。角度を攻め過ぎたり、厚みを薄くし過ぎれば、窯の中で潰れてしまふ。潰れるその限界まで薄さと角度を調節し、焼いては失敗し、また調節を繰り返す毎日で、まさに重力との戦いでした。ようやく納得のいく形が見えてきたのは、4年後の2012年のことでした」

飛松さんは、それでもまだ完成には至っていませんと語る。

「作品としては良いものができるようになってきましたが、なかなか気に入った灯具が見つかりませんでした。どこにでもあるプラスチック製のものでは、どうしても納得できなかったんです。ですから、まだ完成とは言えず、発表を控えていました。そんなある日、これだという真鍮製の灯具を見つけました。それからまた、その灯具に径を合わせるため、一から工程のやり直しです」

そして2014年2月、独立から10年の期間を経て、森岡書店での初個展で磁器製ランプシェードを発表。デビューを飾ることとなった。

### 型物ならではの “バリ”にこだわる

飛松さんは陶磁器の製作を始めた当初から、ろくろではなく、型を用いた作品づくりにこだわり続けている。

「ファインアートから入っているので、量産目的よりも型物ならではの可能性を追求していきたいという思いがありました。また、型物は型と型との境界線にバリ(残材部分)が生じますが、そのバリを生かした作品づくりに没頭しています。なお、工業デザインの視点からシェードの形状を型取りするなら、組み合わせの型は最低二つあれば十分です。でも、正中線で割っても面白味はない。合理的に割るのではなく、3、5、7とあえて奇数個の型を用いて複雑に割っています」

最近では、もともと光量を確保するために底面を開いた作品を、逆に袋状に閉じてみる試みがなされている。

「後から底面の型を足しているの、思いがけないバリが生まれてきます。最初から意図するのではなく、素材と向き合った結果、そうなるし、そうさせてくれるという、自分の予想を超えた表情はとても刺激的です」

2016年末に行った展示会のコンセプトも、“型のバリ”である。

「これまで、『odd line』以外の作品では、バリを削り取っていました。ですが、段々とバリを削る行為自体に違和感を感じてきています。バリは型でつくっているからこそ、出てくる表情です。型が摩耗すれば、バリは自然と成長してくる。それはある意味、自分がこの素材と製造方法を選択した結果なのだから、残しても良いのではと思うんです。ただそうすると、割り線の位置は、元々削り取るつもりで設定しただけなので、バリを残すのならここで良いのかとなくなってくる。今、型を割る位置についても、また考え直しているところです」

飛松さんは、「ピシッと整えられた新築の空間に、一つでも『揺らぎ』を感じさせるものが入ると、そこに何か生きている物が入り込んだ感じがし

